

マックス・E・アマンの 世界馬術界展望

マックス・E・アマン氏は政治ジャーナリストから馬術界に転身し、障害飛越のワールドカップを創設しオーガナイズするなど馬術界に多大な貢献をしてきた人物だ。そのアマン氏が、世界の馬術界の過去から現在までの話題を縦横に語る。

text: Max E. Ammann design: Dynamite Brothers Syndicate

フリッパ殿下 FEI会長の日々

1 964年に開かれたFEI
総会で英国のエリザベス女

王の夫であるエディンバラ公フ
リップ殿下がFEIの会長に選出
された。それ以前はオランダのユ
リアナ女王の夫であるベルンハ
ルト殿下がこの地位にあった。

当時のFEIは王子、伯爵、男
爵、軍の大將、大佐、そして富裕
階級の人々など名のある老人たち
のたまり場所の様相を呈してい
た。彼らは一年に一度、ブリュッ
セルのパレスホテルに参集しルー
ルの変更について話し合い、国際
的な競技会の日程を決め、選手権
の役員の選出を繰り返しているだ
けだった。

当時FEIの本部はブリュッセル
にあり、隣はベルギー馬術連盟
の建物でここからも2人の役員が
FEIで働いていた。この重要な
会合で馬のバスポートや薬物の扱
い、広報、マーケティング、競技
会のスポンサー探しなど最重要と
思われる案件が話題に上ることさ
えなかった。フリッパ殿下が選
出された64年にはFEIの最初の
イベントシリーズであるネーショ
ンズカップにおいて年間ポイント
制を導入することが決まったこと
でさえ大きな前進だった。しかし、
この通称プレジデントカップと呼
ばれるネーションズカップはスポ
ンサーが1社もついておらず、14
の開催国は賞金を供出する気配も
見せなかった。

ところで、74年のヒックスステッ
ドで開催された障害飛越の世界選
手権の開催中に、この大会に集ま
った約60人の国際的に活動する馬

術ジャーナリストがインターナシ
ヨナル・アライアンス・オブ・エ
クエストリアン・ジャーナリスト
(IAEJ)を創設した。私はこ
の組織の初代の会長を務めること
になった。76年のモントリオール
オリンピックの開催期間中に、私
はIAEJの会長として、FEI

の会長との会談を求めた。互いの
共通の利益を話し合う必要性を強
く感じていたのだ。英国王室の一
員であるフリッパ殿下はメデイ
アに対し不信感を抱いているもの
と予想していたが、実際に会って
みるととても友好的で気遣いの細
やかな人だった。フリッパ殿下
は選手権やCSI0での記者やカ
メラマンの取材環境を向上する必
要があることに理解を示してくれ
た。IAEJが求めたのはごく基
本的なことだ。競技場に取材者用
の場所を確保すること、そしてタ
イプライター、電話、テレックス
を備えたメデイアルームを用意す
ることを求めた。当時の重要な競
技会であったローマでのCSI0
でさえ、この要望をひとつも満た
していなかったのだ。

ワールドカップ創始秘話

この会談の最後に私はフリ
ップ殿下にひとつの提案をした。
FEIは規模の大きなグランプリ
クラスの競技会を一連の流れにま
とめ、スキーやFIIのようにワー
ルドカップ形式にすることを考え
てはどうだろうか。はじめは驚
いていた殿下だが、さらに説明を
試みるとこのワールドカップとい

1984年開催のロスアンジェルスオリンピックにおける総合馬術の団体のメダル授賞式にてFEI会長のエディンバラ公フリッパ殿下(オレンジのジャケットを着た長身の男性)がメダルを授与した。この時、金メダルはアメリカ、銀メダルはイギリス、銅メダルは西ドイツが受賞した。©Kit Houghton





英国ウィンザー城で毎年開催される由緒正しい馬術イベント、ロイヤル・ウィンザー・ホースショー。2005年の4頭立て馬車競技に出場したフィリップ殿下(左)。当時83歳。
©UK Press via Getty Images

うアイデアに興味を示し、私に企画書を書くようにと勧めてくれたのだ。

実はこのモンテリオールの会談の中でいち早い実現を依頼した件がある。それは、ジャーナリストのために記者会見の席を設けてもらえないだろうかということだった。殿下はその場で理解を示し、2日後、F E I 史上初の記者会見が開かれることになった。会見に出席したF E I 会長のフィリップ殿下とドウ・モンテ・ドウ・ホーン家のシエバリエの称号を持つ事務局長が50人強のジャーナリストを迎えらえた。私が当日の司会を務め、フィリップ殿下に最初

の質問をした。「一昨日開催されたF E I 事務局の会議の内容を知らせていただけますか。すると、その質問を聞いた事務局長が脅えたようにノーを繰り返したのだ。フィリップ殿下はこの興奮気味の事務局長に向かつて「なぜ伝えられないのかね。われわれに隠すことなど何もないだろう」と言い放った。これこそがF E I とメディアの良好なコミュニケーションの始まりだった。

78年5月、ワールドカップ・プロジェクトの実現のためライダイ、競技会の主催者、そしてさまざまな関係者と膨大なミーティングが開かれた。その後、私はロンドンに飛び、フィリップ殿下に会うためウィンザー城に向かった。F E I の障害飛越委員会がワールドカップのための新しいルールを承認してくれたところだった。このルールは最終的にF E I 会長によって承認されなければならぬ。フィリップ殿下は私の書いた10ページにおよぶそのルールを念入りに読み、ついに承認してくれた。そして一言加えた。このアメリカ英語を1私は10年間ニューヨークで暮らしていたのだ。まっとうな英語、イギリス英語に

書きなおす必要がある。そして、私に向かい、君がこのワールドカップを推進しなければならぬわろうと。「マネージャーだろうか、ディレクターだろうか」。私はディレクターを選び、その役目をその後25年にわたり果たすことになる。フィリップ殿下は79年4月にスウェーデン、ヨーテボリで開催されたワールドカップのファイナルを観戦された。F E I 会長を退く86年までこのワールドカップ・ファイナルには必ずといっていいほど出席してくれた。殿下のサポートと、殿下がスポンサーであるボルボ、オランダの農林大臣とが気楽に付き合える立場にあることがこのワールドカップを支えたのだ。86年にF E I 会長の座を娘のアン王女に譲る際にはこの関係は強固なものとなっていた。

最高のF E I 会長

今にして思えばフィリップ殿下がF E I 会長職にあった22年間にいかに多くのことが決定され、新たなことが取り入れられたことだろう。たとえば、馬車競技やエンディランス、ヴォールディングが

F E I の種目として認められたのもフィリップ殿下の在任中のことだ。殿下のこうした競技に対する柔軟な受け入れは、馬を使ったスポーツはF E I として受け入れるべきだという思いが根本にある。ただ、ポロだけが曖昧なままに残された。殿下自身が優れたポロプレイヤーでありながら、あえてポロ界にF E I に加わることを避けさせていたように思われる。殿下の在任期間で特筆すべきこととしてヤングライダーというカテゴリを作り、ポニー選手権を開催したことが挙げられる。また、世界を8つの地域に分け、競技会の開催頻度により5つのレベルを作った。さらに70年代には薬物検査の導入と、馬のパスポート付与が加わった。

マックス・E・アマン

1938年、スイス生まれ。1964年に渡米しニューヨークの国連本部詰り外国人特派員として主に政治関係のジャーナリストとして活躍。69年に『スイス・アメリカン・レビュー』紙の編集長に就任。73年にスイスに帰国し、『ルツェルン新聞』に編集長として迎えらる。そのかわり、馬術競技観戦が趣味だったことから馬術関連の記事も手掛け、翌74年に国際馬術ジャーナリスト連盟(IAEJ)の会長に就任。78年新聞社を退社、以降、馬術のさまざまな大会でディレクターを務めるなど、多大な貢献をしてきた。

69年に馬車競技がF E I の競技種目となったのはフィリップ殿下の個人的趣向の影響がある。殿下自身が4頭立て馬車競技の国際的な競技者だったのだ。殿下は76年から86年にわたり馬車競技の世界選手権に7回、英国チームの一員として出場している。このチームは80年に金メダルを獲得したほか3回銅メダルに輝いている。個人としては82年の6位が殿下の最高位だ。そして、これは付け加えるべきだろう。殿下の娘、アン王女は総合馬術で71年、ヨーロッパ選手権を制し、孫のザラは同じく総合馬術の選手で、05/06シーズンに世界とヨーロッパ選手権の覇者なのだ。そしてふたりともオリンピックに出場している。

フィリップ殿下が在任した22年間でF E I は小さなスポーツクラブから近代的な国際スポーツ組織に発展した。殿下が会長を引退してから四半世紀以上が経ち、F E I 会長、そして事務局長、委員会、ローザンヌの本部事務局は効率よく組織を運営できてきているのか、また利益につながる活動ができていのかとつねに問う必要がある。



2002年開催のロイヤル・ウィンザー・ホースショーに出場したフィリップ殿下。
©UK Press via Getty Images